

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷三十五第

月十年六十和昭

論 叢

日本銀行を中核とする金融機關の組織體……………

經濟學博士 小島昌太郎

資本主義を越ゆるもの……………

經濟學博士 柴田敬

イギリス海運政策史上のアメリカ……………

經濟學士 佐波宣平

個人主義經濟倫理の批判……………

經濟學士 白杉庄一郎

ナチス經濟團體とカルテル……………

經濟學士 靜田均

研 究

石門心學に於ける經濟思想……………

經濟學士 竹中靖一

經濟社會の構造分析……………

經濟學士 北野熊喜男

說 苑

ロバートソンの價格水準理論の批判……………

經濟學士 青山秀夫

陳翰笙著「産業資本と支那農民」……………

經濟學士 鈴木總一郎

附 錄

彙 報

外國雜誌論題

説苑

ロバートソンの價格水準理論の批判

青山秀夫

別稿¹⁾に於て吾々はロバートソンの價格水準變動理論の説明を試み來つた。以上の敘述はロバートソンの理論の解説に殆んど終始し、しかも頗るたどくしむものであつたが、これによつてロバートソンの Geiswoll なる理論の理解が少しでも深められるならば、吾々の努力の目的は達せられる。さて此の解説の後に若干の批判を記したいと思ふ。

既述の如く、ロバートソンの理論は貯蓄、投資の概念を利用することによつて一層簡明に構成し得られ

る。即ち、ロバートソンが購買力の流れ (stream of money) と呼んで財の流れ (stream of goods) に對立せしめたものうち、所得又は収入からその支出を差控へられ、従つて價格水準を押し下げる方向に作用する部分、並びに資本の増加に伴つて購買力の流れに添加され價格水準を押し上げる方向に作用する部分を特に取出して、考察することが便宜であると思はれる。購買力の流れの此の二つの部分が如何なる内容を有するかは、勿論問題構成の如何によつて夫々異なるであらう。こゝにそれを「貯蓄」「投資」と呼ぶのは便宜に過ぎず、或は購買力の流れに於ける脱落部分、添加部分と呼ぶ方が、或は適當であるかも知れない。²⁾

とにかく、貯蓄と投資との對照によつてロバートソンの理論が著しく簡單となることは事實であるが、ロバートソンの理論の特徴がそれよりも深いところにあつたこともまた既述の如くである。即ち、彼は四つの係數によつてこれを更に財貨側の變動に結合せんとしたのであつた。貨幣側の變動と財貨側の變動とを相關

- 1) 參照、拙稿「貨幣流通期間と平均生産期間」(本誌第五二卷第六號)「價格安定政策の資本形成效果」(本誌第五三卷第二號)「ロバートソンの四つの係數の理論」(本誌第五三卷第三號)。
- 2) 此の點を包括的に取扱つたものとしては、例へば、次のものが挙げられる。

的に考察しつゝ、價格水準の變動機構を究明しようとする要求を此の如く積極的組織的な形に於て實現したことは、たしかにロバアトソンの否み難き功績と云はねばならぬ。ロバアトソンの經濟變動理論を其他の學者、例へばアフタリオン、シユムベーターの、またシユビイトホフ、カツセル、ハイエクの景氣理論に比較するとき、このことは一層明瞭に觀取されるであらう。

とは云へ、他面に於て此の四つの係數の意義をあまりにも強調し過ぎたことは、またロバアトソンの失敗でもあつた。彼は上記の「貯蓄」「投資」の概念を用ふる分析を避けて、此の四つの係數を以て價格水準の變動の問題を全部的に處理せんとする傾向を有する。然し乍ら、既に吾々が見たやうに、此の四つの係數は、「貯蓄」「投資」を通して價格水準に影響するのであり、價格水準の側から見れば、貯蓄、投資こそ第一次的決定因子であり、これに比して四つの係數は寧ろ第二次的である。従つてロバアトソンの如く、第一次的決定因子を背後に斥け寧ろ第二次的決定因子を正面に持ち出

ロバアトソンの價格水準理論の批判

さうとするとき、理論的混亂が生じ易いことは明かである。實際ロバアトソンに於てかくの如き不手際は隨處に見られる。以下、先づ前稿で問題とした「銀行政策と價格水準」に於ける混亂を明かにし、次に本稿で取扱つた四つの係數の理論についてこれを論ずる。

前稿で問題とした「銀行政策と價格水準」での理論について、第一に注意すべきは、吾々が「端初的物價騰貴」と呼んだものに關する。ロバアトソンは端初的物價騰貴を問題外に放逐し去るが、それはかくの如く輕視し得られるものであるが、既に吾々の分析が示したやうに、端初的物價騰貴は、新雇傭者の實物殘高創設の速度が鈍ければ鈍い程、長期に亙る。従つてそれは現實には相當長いもの、従つてそれだけ重要なものと考へねばならぬ。いふまでもなく、此の端初的物價騰貴は貯蓄に對する投資の過剩より起るが、貯蓄投資の觀點から端初的物價騰貴を含めつゝ、問題を處理する方(例へばケインズを見よ)が、貨幣流通期間及び平均生産期間強調の意義をするの餘り端初的物價騰貴を度外視する

第五十三卷 四六七 第四號 一〇五

R. Frisch : Et generelt monetaert begrep- og symbolsystem, Oslo, 1935. R. G. Hawtrey : Capital and Employment, 1937. Chapt. VI. E. Lindahl : Money and Capital, 1939. Pt. 1. pp. 74-136.

ロバートソンの理論よりも合理的でないであらうか。

第二に、此の點と關聯して、貨幣流通期間の取扱ひについて敍べたい。——ロバートソンの以上の理論を、その適用について見るに、平均生産期間も貨幣流通期間もその時々事情に應じて變動し得べきものでなければならぬ。ところで平均生産期間の變動の場合は、それと生産高との間に例へばベームが迂回生産の收益法則について説いたやうな關係が存在せず、また生産高の増加分も不變である限り、以上の理論は此の變動によつて少しも影響されないであらう。然し貨幣流通期間の場合はこれと異なる。此の場合に於ても、實物殘高創設のための貯蓄の實質價值は、此の新しい貨幣流通期間と生産高の増分との積に等しい。(證明は前と同様である)。然し此の場合には、假令價格水準に變動がないとしても、實物殘高創設を完了した人口部分に於ける保藏分増大の場合または放出分減少の場合が考へられねばならぬ。従つて此の場合には、此等の事情を斟酌して始めて、ロバートソンの命題が成立つことにな

る。

第三に、ロバートソンの理論は、内容的に見れば、たゞ銀行の價格安定政策は M_2 のだけの流動資本の形成をもたらすことを示すに止つてゐる。然しこのことは直ちに、ロバートソンの根本命題が成立し得ることを意味するものではないのである。一例を以てこれを示さう。今、貨幣流通期間は平均生産期間に等しいとして、更に新雇傭者の實物殘高創設期間が生産期間の $\frac{3}{2}$ 倍である場合を考へよう。此の場合に於ては、實物殘高創設のための貯蓄は一律に進まず、波をつつて進む。即ち、雇傭増加期間の前半に於て多く、後半に少ない。従つて銀行は、價格水準の安定のために、貸付を前半に多く、後半に少くせねばならぬ。然るに流動資本形成のための銀行貸付の要求は寧ろ逆の經過を辿り、尻上りとならう。従つて若し銀行が産業側の要求に應じて貸付を行ふとすれば、價格水準も波状を描いて(前半下落、後半騰貴)進むことゝならう。従つて、貨幣流通期間が平均生産期間と一致することゝ

は、價格水準の安定と流動資本の算術級數的增加との兩立を保證し得ざることになる。敢て此の兩立が保證されることを主張せんとすれば、こゝに所謂價格水準は一層備期間を通じて平均したそれを意味すると解せられねばならぬ。

次に前稿で取扱つた四つの係數の理論に移らう。³⁾元來此の四つの係數の理論は、複雑なる現實の變動過程に直接に適用せんとする意圖のもとに、構成されたものであり、實際またロバートソンはその著書に於て此の適用を實行してゐる。然しながら、既に多くの假設的構成の下に於てすら、此の四つの係數だけで問題を處理し難いことは、前稿で詳論した通りである。一々こゝに詳言しないが、複雑なる現實の變動過程の適用が如何に多くの困難を含むかは、これによつても明らかであらうと思ふ。

二

以上によつて、價格水準の決定因子として貯蓄及び投資を第一次的と見るべきであり、寧ろ第二次的なる

「四つの係數」に第一次的位置を與へたために、ロバートソンの混亂が生じたとする私見は明かになつたと信する。尚以上の説明よりして、貯蓄及び投資の形式的なる概念は如何なる事態にも適用され得る結果、此の觀點に立つときは四つの係數の理論の如き拘束を蒙らぬことも明かであらう。然し、何れにせよ、これらは謂はゞ技術的問題である。最後にロバートソンの理論構成の根本原理に觸れる問題について、若干注意を試みたいと思ふ。

既述の如く、夫々の經濟主體は、その實質所得乃至生産力と一定の關係(貨幣流通期間)に立つところの、實物殘高への要求を有し、貯蓄は現實の實物殘高と此の所望の實物殘高との比較に基いてなされる、といふのがロバートソンの議論の出發點である。私は第一にかくの如き貯蓄の實物經濟的分析に對して疑問を呈出したい。こゝで注意すべきは、企業者と勞働者とが未分離の社會經濟といふ想定によつて、此のロバートソンの構想が著しく容易ならしめられてゐることであ

3) 前掲拙稿「ロバートソンの四つの係數の理論」

る。本来、實物殘高に對照せしめらるべきものは生産力でなく實質所得であらうが、こゝでは實質所得と生産力とが一致するからである。然し現實は勿論これと異なる。企業者は一定の貨幣勞賃を支拂つて勞働者を雇傭しつゝあり、然もその貨幣勞賃率は種々の事情（慣習契約の長期性など）より固定的であり、従つて物價の變動によつてその實質勞賃はその生産力——かゝるものが存在するとして——から絶えず乖離する。従つてこゝでは、勞働者の生産力は、實質勞賃との結び付きを失つた結果、實物殘高とも無關係となる。換言すれば、生産力は、所得との關聯を失ふ結果として、經濟計畫に對して何ら指導力を持ち得ざるに到り、その結果として貯蓄の大さとも無縁となる。

既述の如く、新雇傭者の創設しようとする實物殘高が貨幣流通期間當りの生産高に等しいことが、以上の理論の根本をなしてゐる。然し、これによつて見れば、此の實物殘高は、流通期間當りの實質所得には等しいかも知れないが、流通期間當りの生産力に等しいとは

限らぬであらう。勿論此の場合と雖も、此の貯蓄の大さをその生産力に關係せしめることは出来る。然しそこに現はれる比率は、最早現金保有性向といふ心理的實在を表はすものではなく、技巧的に算出せられたる數字に過ぎぬこととなる。尙此の場合、公衆はたゞ現金殘高と貨幣所得との間の關係を考慮するに止る、といふ批判も可能であらう。果して然らば、實物殘高は支出及び貯蓄の決定を何ら左右し得ないこととなる。事實は寧ろかくの如きであるとも考へられるが、此の點はこゝでは立入つて論じない。

第二に、このことと關聯して、新雇傭者の貯蓄が流動資本形成資金を賄ふと見る見解を吟味したい。既述の如く、投資側に平均生産期間が立つのに對して貯蓄側に貨幣流通期間が立つのは、此の貯蓄の主體が新雇傭者なるが故である。然し新雇傭者の貯蓄はそれほど重要であらうか。私見によれば、此の場合それよりもはるかに重要な役割を演ずる貯蓄がある。それは企業者利潤からの貯蓄である。信用擴張の過程に於ては、

一般に價格騰貴に伴ひ利潤が増加することは周知の事實である。流動資本を引續き増加して行く場合に於て、それを賄ふべき貯蓄の源泉として此の利潤は最も有力であり、これに比して新雇傭者の所得は極めて貧弱である。果して然らば、貯蓄の大きさを決定するものは新就業者側の事情ではなく、かくの如く利潤を得る企業者側の事情でなければならぬ。

第三に問題となるのは、價格水準の決定因子として、以上の四つの係數の他に、尙銀行の貸付利率が考へらるべきではないか、といふことである。方法的に云つて、期間分析の方法の最大の弱點がこゝに存することは嘗て論じた如くである。こゝでは寧ろ、ロバアトソンはその價格水準變動理論に於て此の要素をどう取扱つたかを絞るに止めたい。既述の如く、ロバアトソンは價格水準を以上の四つの係數で圍まれた自己封鎖的なシステムと考へ、利子歩合は其他の要素と共に、此等の係數（特に g の三者）への影響を通じて始めて價格水準に影響すると考へた。明かに此の理論構成はケインズのそれと對蹠的である。然らば何れの理論構成が適當であるか。これは別に論ぜらるべき問題である。